
少女恋愛

ペ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女恋愛

【Nコード】

N0115M

【作者名】

ペ子

【あらすじ】

思春期の片思い。気持ちの勘違い。

同じ制服を着ているのに、どうしてこんなにも違うんだろう。狭い教室の中で空間を共にしてるはずなのに触れられない。視界に入ることを許されても一線を越えることは許されない。今すぐにも肩を掠め揺れる艶やかな黒髪に、チョークを握る白く細い指に触れたいのに。手を伸ばせば届く距離にいるのに私の腕は何もせず自分のスカートを握る。ただもどかしくてたまらない。その腕を奪ってどこへでも行ける気がしたのに。

人は美しいものを好む。あの人は美しかった。入学して初めて視界に入った時、少女漫画みたいに胸の音が変わった。恋に落ちる音と勘違いしそうなくらいだった。あの人は私にとって憧れの存在。私にないものをもっている、それだけの。

姿勢の良さに無駄な肉の一切なく手足のバランスがきちんととれた体型、枝毛や切れ毛の一つさえない黒髪。汗さえ価値のあるものに見える爽やかさ。すれ違うたびに香る石鹸の匂いは私の想像が生み出した香りなのかもしれない。剣道着の白がとても似合う、それほどあの人は清らかだった。

剣道着を身にまとったあの人は制服を着るよりずっと高潔だ。布を頭に巻き、端正な顔立ちが露わになる。鋭い眼差しで相手を捕らえる様、けれど防具を外して見せる笑みはとても輝いていた。強さの中にある優しさが溢れている。

私はあの人を三階から眺めるのが好きだった。放課後、私は教室に残り窓から上半身を出して中庭を見下ろした。そこでは剣道部が素振りをしたり軽く走ったりしている。水道で顔を洗ったり水を飲んだり。私はあの人を飲む姿も好きだった。髪を耳にかけ口を付ける姿、自然と唇に目が行ってしまった時、私は既に恋に落ちていたのかもしれない。

それに比べて私は何ももっていなかった。鏡を見れば嫌気がさすほどの何の特徴もない顔。団子鼻に一重にさえ見える奥二重、両頬に浮かび上がるそばかす、眉毛も無理矢理整えたせいで青くなってる。化粧をすれば少しはマシになるかもしれないけど、あの人は化粧なんかしてない。誤魔化しの一切ない顔で過ごしている。唯一髪の毛のケアを頑張ろうとしたけど、髪の毛の質があまりにも違いすぎた。私の髪は針金のように剛毛で量もある。あの人は柔らかくて天使の輪もできてる。あの人に少しでも近づこうとすればするほど、遠ざかっていくような気がしてやめた。

あの人の名前があった時、同じクラスになった時、今までで一番私の胸は高鳴った。それこそ誰かに聞かれてしまうくらいに。やった、そう呟いたはずなのに周りに聞こえてしまっていたらしい。後ろから視線をいくつも感じた。嬉しかった、この一年間が去年よりずっとずっと楽しくなる気がした。憧れからもう、恋に変わっていた。

初めて名前を呼ばれた時、夢かと思った。でも夢なんかじゃ嫌だと自分自身に訴えた。あの人の視界に、綺麗な瞳に私が映ってる。それが一番最初の奇跡、次の奇跡はあの人が私に話しかけたこと。そして三つ目の奇跡は私の名前を呼んでくれたこと。一瞬でいくつもの夢が叶ってしまった。あの人の背中を見ながら胸を強く抑えた。そうしないと心臓発作で死んじゃうくらいにドキドキが止まらない。その日の夜は眠れなかった。次の日は挨拶をしようと思った。

でもそれが最初で最後だった。次の日にはもうグループが出来ていて、私とあの人は離れてしまった。あれはほんの些細な挨拶にすぎなかった。私の中であんなにも嬉しかった出来事があの人にとっては何てことのない日常の一部にすぎなかったのだ。

それでも良かった。前よりずっとずっと距離が縮まったから。あのと同じ教室で同じ授業を聞いているだけで幸せだった。遠い存在が近くになることで気持ちも近くなっていく気がした。わざわざ

見に行かなくても教室に座ってるだけであの人が視界に入る。それは幸福の瞬間だ。

私があの人を見てるように、あの人もまた違う人を見ていた。知りたくもなかったのに、あの人を見ていれば自然とわかった。私と同じように何ももってなさそうな剣道部の男子。けれどよく笑う人だった。あの人には不釣り合い。どうしてあいつなの、私は聞きたくてたまらなかった。あいつを見るあの方は綺麗で綺麗で、私はあいつに恋をするあの人をもっと好きになっていた。恋はそんな綺麗なものじゃない。だけど、人を想い笑うあの方は確かに綺麗だった。あの人から見える世界は私の見る世界じゃなかった。私を見てくれないあの人に憎しみさえ出ないほど、恋をするあの方は綺麗なのに。この恋もあの人に対する想いも全部、何もかも美しいものだと私は信じていた。

学年が変わって三階から二階になった。階だけじゃない、見える景色も変わった。人差し指と親指を合わせて作った四角い枠、そこにあの人だけが映っていたはずなのに。あいつがいた。あの人と一緒に並んであいつはいた。あの人が笑ってる、あいつに笑いかけないで。あいつに笑いかけるときだけ、あの人嫌いになった。もう、我慢できなくなっていた。ただ何もせずいい子のふりをする私は本当に醜かった。あの方の世界には私は存在しなかった。私の世界にはあの人しかないのに。

あの人とあいつが付き合った。その事実が耳に入った瞬間、胸の音が一切聞こえなくなった。心がぐしゃりと潰れる。二度と戻らない、あの人があいつのものである限り。

お互い何て呼ぶの、手は繋いだ、キスはした、セックスは、あの方の喘ぐ姿を思い浮かべた。自己嫌悪に陥った。どうして私は女な

の、どうしてあなたは女の子なの。どうして私はあなたじゃないの。どうしてどうして……あいつなんか見ないで。あなたを愛していいのもあなたが愛していいのも私だけなのに。あいつを好きなあなたを好きになった私は一体誰を愛していたの。私はただ、あなたに見てほしかったただけなのに。

目の前に座るあなたの背中を見つめながら私はあなたを憎んだ。深く愛したからこそ、憎むのだとあなたが私に教えてくれたから。もうあなたの目にあいつを映したりなんかしない。

あなたの席に掛かっていた竹刀を取り私は両手で精一杯の力を込めてあいつの頭を殴った。ボーリング玉よりも柔らかく、弾力のあふれる感触がした。そのままあなたの手を取って私は走った……、なんて、そんなことできるはずがない。考えても考えても私の手は数式を書くだけだった。

授業の終わりのチャイムが鳴る、同時に私は求めるように右手を伸ばした。彼女に初めて触った。シャツから伝わるブラジャーの感触、プチン、ホックを外して私は急いで鞆を抱え教室を逃げるように走って出た。グラウンドで授業をするクラスに見向きもせず全速力で走り抜けた。

バカらしくてアホらしくてたまらない。こんなものが恋だったなんて。こんなの恋なんかじゃない、恋愛ごっこだ。私はあの人になりたかった、あいつに見られるあの人になりたかった。あいつに触られるあの人になりたかった。それだけじゃん。

（後書き）

恋する自分に恋をして、誰に恋をしたのかさえ忘れてしまう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0115m/>

少女恋愛

2010年10月28日08時52分発行